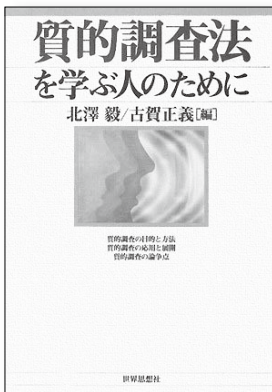


古賀正義 中央大学文学部 教授

北澤 毅・古賀正義 編

『質的調査法を 学ぶ人のために』

世界思想社
初版1刷 2008年5月



『質的調査法を学ぶ人のために』(世界思想社)は、世に知られた「学ぶ人」シリーズの一冊として2008年に刊行された。筆者と北澤毅氏との共編著であり、執筆者は筑波大学の教育社会学研究室修了者(山村賢明先生の門下)を中心

に構成されていた。いまでこそ質的調査の解説書は、翻訳本も含めて、数多く存在する。だが、2000年前後までは日本人の手によるものはほとんどなかったといってよい。フィールド経験豊富な佐藤郁哉氏や茂呂雄二氏との対談を含め、会話分析や構築主義、エスノグラフィーなど調査法の理論的視点にまで踏み込みつつ、質的調査の実践者や挑戦者を増やそうと考えて構成した著作だった。

本書は、実はその10年前に出版された『〈社会〉を読み解く技法—質的調査法への招待』(福村出版、1997年)の続編にあっていた。まだ質的調査が客観性の欠如や実施の困難さから多くの研究者の支持を得ていなかった時代に、その重要性を世に知らせたいと企画した挑戦的な本であった。それゆえに、恩師の山村賢明先生はとても心配され、「この種の本は売れないが、気にしないで進みなさい」と発案・企画した私を、出版する前から勇気づけてくださった。

だが、この「技法」本にはいま振り返っても、「多

声法的エスノグラフィー」,「物語・ナラティブ分析」,「構築主義的言説研究」,「音声・会話分析」など時代の先端を行くアイデアが、未消化な部分も多々あったが、満載されていた。例えば、まだクリフォードの『文化を書く』が専門家にさえ浸透していなかった頃に、ポストモダンの人類学を論じるといった具合であり、教育研究の枠を超えた試みでもあったといえよう。予想に反して、出版の反響は非常に大きく、社会学研究における質的調査に関する本の先鞭をつけ、現在(オンデマンド版)まで数千部あまりを売り上げている。

「新しい教育社会学」の潮流

ここにも前史があった。1980年代に入って教育社会学の世界には、イギリスの「解釈的アプローチ」が紹介された。それまで有力だった構造機能主義の研究は、システムとしての学校・教育を対象としてマクロ分析を重視し、人材選抜の問題や社会化の問題を量的調査によって把握しようとしていた。統計技法の飛躍的な発展やコンピューターの急速な普及もあり、多変量解析など分析レベルも高度になっていた。

一方、「新しい教育社会学」は、教室や家庭などのミクロな日常生活場面での実際の出来事や人々の相互行為を調査し、教育問題の分析にアプローチしていた。例えば、同じ受験競争をとらえても、アンケートによる意識調査ではなく、学校現場でのテスト形式の初期的な適応過程を小学一年生の観察から行うといったスタンスであった。文脈に依存する実践的な知の獲得に強い興味を抱いて調査しようとし、エスノグラフィーやインタビューなど、質的調査のデータ収集が重要なポイントを握っていた。

もともと筑波大学の研究室(門脇厚司先生のゼミも含め)は、80年代の初めに現象学的社会学者シュッツの著作を英語版(邦訳はまだ存在しなかった)で購読し、あるいは構造主義的なパースティンの教育コード論を学習するなど、解釈的アプローチにきわめて近いスタンスにあった。社会的構築主義創始者のキツセあるいはシコレルも、当研究室を訪問し先端の研究事例を講演してくれたり、食事会で一緒に語り合ったりした。



なぜ日常生活世界の構築にこだわって分析を進める必要があるのか。折しもフーコーやブルデューなどに注目が集まるなか、あたりまえの自明な教育の世界の秩序構造こそ、またそこに横たわる文化や政治の力学こそ、読み解くべき研究対象であると考え、機運が高まっていた。

実際、財団の資金をえて、小中学校をフィールドとしたビデオによる質的調査や、私自身の修論のテーマとなった教育困難高校でのエスノグラフィーなどを実践することも行った(伊藤忠記念財団調査研究報告書8『受験体制をめぐる意識と行動—現代の学校文化に関する実証的研究』,1983年)。これといった調査の解説書はなく、海外の文献や翻訳書とりわけシカゴ学派以来の知的財産を活用しつつ、手探りでの試みであった。現在のようにICレコーダーやマイクロビデオなど便利な機器がなかったので、データ記録の方法には常に困難が付きま続った。教室の片隅にかなり大型のビデオを据え付けさせてもらったり、カセットテープレコーダーでマイク録音をしたり、あるいは絶えずフィールドノーツを持ち歩きながらメモしたりの連続であった。それでも、論述の基本は正確な日常生活のデータ収集にあるという信念は、皆が共有していた。

日常性を読み解く方法

だから、質的調査の技法自体を洗練させようと出版を意図したのではなく、サックスの邦題を借りれば、「日常性の解剖学」を行う適切な方法を模索する上で、どうしても対象・理論・方法の一貫性を示すことが求められていた。とりわけ、教育という生の事象の分析には、だれもが語りうる固定した観念や有力な言説が付きまといやすい。いったんそれを括弧にくくって事実を見直す作業が不可欠であった。量的調査の分析アイデアにもつながらざる知的な発見・理解が、現場には数多くあった。

私自身の研究についていえば、初発のカルチャーギャップの大きな教育困難高校での調査体験が方法的自覚を強くした。本書でも、冒頭1章で「質的調査の四半世紀」として、ネットでも容易にみられるインタビューの時代に「実証する」とは何かを問

いかけてみたが、実際の被調査者と対面し対話することの調査者への影響は、「当事者の視点に立つ」と語ってしまうと陳腐なほど、計り知れない。その後の少年院調査やひきこもり家族調査、あるいは高校中退者調査などでも、当事者性を組み込んだ調査プランや分析方法をとることを心がけてきた。例えば、学校の秩序を維持することが教育的コミュニケーションの前提になっている事実は、ブリーチ(攪乱)された教育困難高校の日常ゆえに可視化され、感受されたと思う。

もちろん本書の2章で北澤氏も論じているように、調査実践に理論的な整合性を求める上で、「質的調査の思考法」になじんでおくことは不可欠である。ちょうど野球のバッティングで打つという身体的感覚が、そのコツを言語化することよりも先に来るように、「センス」を育む調査経験がある。外側からの問題関心の形成はもちろんあるが、場に埋め込まれることによって問題を感じ取る局面は重要である。何らかの理論を事実にはめて外挿的に解釈するのでなく、方法が生成する現場の実践から内在的に読み取るのである。

とりわけ、量的調査のようにある一般的事象のサンプル(標本)として出来事を見るのではなく、まぎれもなく実際にその場で起こったケース(事例)としてみる必要がある。いくつもの中の一つの出来事ではなく、その場で生きる人に解釈可能な意味のある出来事であったという事実にこだわらねばならない。エスノメソドロジーでもエスノグラフィーでも、あるいはインタビューであつてさえも、その基本スタンスは変わらない。

今日、質的調査法のテキストはノウハウをわかりやすく解説してくれるものが増え始め、時にDVDやネットでリンクをたどると調査活動の様子さえ見ることができるようになった。それに伴い、個人情報保護やデータの保管方法など、具体的な倫理問題も生じるようになってきている。こうした時代だからこそ、もう一度、何のために調査するのか、調査者とはいったいだれのことなのかを真摯に問い直したいと思う。本書は、いつも私たちを質的調査の原点へと導いてくれていると確信している。